

下田歌子と津田梅子 —女子教育のトランスナショナルな連鎖—

Shimoda Utako and Tsuda Umeko : Transnational Circulation of Women's Education
between Japan and Britain in the Meiji Era

香川 せつ子

KAGAWA Setsuko

はじめに

『研究叢書』で私は、下田歌子と津田梅子の生涯や業績を、トランスナショナルという観点から比較考察しました。もともと西洋教育史を専攻しており、イギリスの女子教育史、なかでも19世紀後半から20世紀前半の女性の高等教育運動やアカデミック・プロフェッションへの進出について研究してきました。そうしたなかで、高度な学問や教育研究のために欧米諸国の国境を越えて移動した女性たち、さらには日本から欧米に留学した女性たちのことに関心をもつようになり、下田歌子とその先駆的女性の一人であることを知った次第です。

津田梅子は、よく知られているように、1871年の最初的女子留学生の一人です。下田歌子の留学は1893年で、女子教育視察を目的として国費で派遣された最初の例でした。二人が明治を代表する女性教育家であることに異論はないでしょう。古くは女性史家の吉見周子さんが1980年に『歴史読本』(25-2)で、明治女子教育界におけるライバルとして取り上げられています。一般に、津田梅子は「西洋女子教育の導入者」として進歩的とされ、下田歌子は「国家主義、良妻賢母教育の権化」、保守的教育者と対立的にとらえられる傾



向がありました。これは、第二次世界大戦後の歴史観、教育史観によって構築された構図と言ってよいでしょう。戦前の女子教育界における最高指導者として人気と名声をはせた下田は、戦後、軍国主義・国家主義を支えた体制内人物というレッテルのもと、歴史の後景に退いてしまった感があります。他方、津田梅子は、アメリカ留学の経験を活かし日本女性の社会進出と地位向上に貢献した女性として評価されるようになりました。

しかし、下田と津田の距離は思いのほか近く、津田梅子の教育者としてのキャリアは、下田歌子の桃天学校からスタートしました。1885年に華族女学校が開校したとき、専任の教師に任命された女性は下田と津田だけでした。翌年下田は学監、津田は教授となり、その関係は15年あまり続きます。二人はまた、華族女学校在職中の1890年代に、女子教育視察のために、それぞれイギリスを訪問しました。私は二人の共通点に注目し、歴史資料から浮かび上がる親和性と相違点を見出して、比較考察しました。トランスナショナルな観点とは、国境を越えた移動を通して生まれた女子教育の新しい形態、他国の文化と日本の伝統文化との交差、その過程に含まれた思想的対立や葛藤について考えることです。そうした観点に立つと、下田が欧米視察から帰国後に中国への女子教育の伝播に取り組んでいるのはさらに興味をそそられることです。宗教や文化的背景の異なる二人が、欧米の社会と家族、女子教育をどう受け止め、そこから何を学び、何を摂取しようとしたかを比較考察することによって、下田歌子の思想と実践に新しい光をあて、教育史上の位置づけを再考したいと考えました。

もうひとつの留意点は、下田と津田が生きた「近代日本」という時代の「時間」と「空間」の特徴です。下田と津田は10歳の年齢差がありますが、ともに幕末に武家の娘として生まれ、明治維新の激動を経て、日本が性急な近代国家建設を進める時代を、女性として、また教育者として生き抜きました。それは、日本が西洋諸国と交流を開始し、産業、政治、教育等社会のあらゆる面で西洋文明を摂取すると同時に、ナショナリズムと帝国主義的政策のもと、西洋諸国がアジア・アフリカへと覇権を伸ばした時代でした。このような時代に、男性エリートの登竜門である官費留学を、女性としていち早く経験した津田と下田は、女性のエリートとしての自覚と国家社会に対する責任を強く意識するようになります。とくに下田の場合は、男性高級官僚に匹敵する俸給と地位を得ただけに、「日本国家を背負う」という意識を強くもっていたと思われます。

そのようなことを意識しながら、まず下田と津田の出会いについて、次に欧米留学経験について叢書で書いたことを紹介し、最後に下田歌子と日本の近代について思うところをお話いたします。

1. 下田歌子と津田梅子の出会い―桃天学校と華族女学校

下田歌子と津田梅子の出会いの場が桃天学校であること、その仲介役を果たしたのが、

のちに初代内閣総理大臣となる伊藤博文であったことは、津田や下田の評伝で知られています。それはとりもなおさず、日本古来の文化と西洋文化の交差のときでもありました。

本稿最終頁に、二人の生い立ちを対照表にしています。下田歌子が岩村藩から江戸に出た1871年は、津田梅子がアメリカ留学に出発した年にあたります。その翌年に下田は宮中に出仕し、まもなく和歌の才を皇后から見出されて、「歌子」の名を賜りました。下田は7年間の女官生活ののち、1882年に伊藤博文等の政府高官の勧めによって桃夭学校を開設します。その同じ年に、津田はアメリカから帰国しています。同じ10年間を、下田は日本の伝統文化、和歌、神道といった雅の世界で過ごし、津田はアメリカの中流階級家庭で成長して、キリスト教の洗礼も受けています。1884年に津田は桃夭学校で教え始め、1885年に華族女学校が開校すると、下田とともに着任しました。1889年に津田はアメリカに再留学し、下田は1893年に女子教育視察のため渡欧します。1898年、津田は三度目の渡米をし、そこからイギリスへと渡ります。帰国後の1900年、津田は華族女学校を辞職し、女子英学塾を設立します。

図1は桃夭学校を開校した頃の下田歌子、図2は帰国してまもなくの津田梅子、二人が出会った頃の写真です。津田は、教育を通して日本国家に恩返しすべく意気揚々と帰国したにもかかわらず、女子留学生のための職場は用意されておらず、政府が自分たちに何の期待もしていないことを知り愕然とします。日本社会における女性の地位の低さに失望していた津田は、伊藤博文の仲介により桃夭学校で教えることを快諾しました。津田は下田校長を尊敬し、父の津田仙を説得して、妹のふきを桃夭学校に入学させています。



図1 桃夭学校時代の下田歌子(写真右)
実践女子大学図書館所蔵



図2 帰国した頃の津田梅子
津田塾大学津田梅子資料室所蔵

伊藤博文が津田を下田に紹介したのは、彼なりの思惑がありました。伊藤は幕末にイギリスに密航した「長州ファイブ」の一人であり、岩倉使節団の一員として、津田梅子たちと同船していました。西洋通の彼は、帝国憲法起草のための欧州調査から帰国後、宮内卿として宮中の近代化に乗り出します。1883年11月の天長節祝賀晩餐会で津田梅子の姿をみつけた伊藤は、すぐに駆け寄り、伊藤家の娘たちの家庭教師を依頼すると同時に、下田の学校で教える段取りをしました。伊藤は皇族や華族の娘たちを西洋上流社会で通用するレディにしあげるといふねらいのもと、皇后の理解と協力を仰ぎつつ華族女学校の設立に着手します。その準備委員に任命されたのが、下田と、バツサー・カレッジを卒業して津田とともに帰国した大山捨松の二人でした。宮中の伝統に西洋文化を加味することで成立した華族女学校では、その後伊藤の極端な欧化政策に反対の声を上げた西村茂樹の校長就任など、欧化派と宮中派のせめぎあいが続きます。下田は本来の経歴からすれば宮中文化の伝統を重んじる立場でしょうが、後見人である伊藤やさらには皇后の意を汲んで、洋装して鹿鳴館での舞踏会にも参加しており、中立的なスタンスで女学校の運営に携わり、生徒や保護者からの信頼を獲得していきました。

桃夭学校や華族女学校の様子は、津田が帰国後にランマン夫人に宛てた膨大な量の手紙からも垣間見えます。100年後の1980年代に津田塾大学本館で発見され、年代順に編集されて *The Attic Letters: Ume Tuda's Correspondence to Her American Mothe* (Weatherhill, 1991) という本になっています。津田の眼からみた日本の社会と慣習、華族女学校の教育が描かれ、明治日本の一断面を伝える貴重な資料でもあります。そこでは、1884年2月に津田が桃夭学校で教え始めたこと、英語を学ぶ生徒は十数人で伊藤博文の妻や娘が含まれていたこと、下田は夫の看病と学校とで多忙なこと、互いに英語と日本語を教えあっていること、そして下田猛雄の死と葬儀のことなど、日常生活の出来事が細かに綴られており、「下田先生は素晴らしい女性です。すべての面で学識があり、上品な女性です。」と、下田の知性と行動を称賛する言葉があちこちにみられます。

2. イギリスへの留学

さて、華族女学校が軌道に乗った1890年代に、下田と津田は欧米に留学しました。津田は1889年にアメリカに再留学し、プリンマー・カレッジとオズウィーゴ師範学校で学びます。帰国して華族女学校に復職したのち、1898年に万国婦人クラブ連合大会参加のために三度目の渡米をし、英国国教会の女性たちからの招待を受けてイギリスに向かいました。日本社会と西洋社会を往復し、二つの文化の狭間で生活しながら、日本の女性に高等教育を授ける学校設立の夢を育んでいきます。他方、下田は若い時代から日本の伝統文化の中心に身を置き、やがて40歳となる1893年に初めて西洋社会を体験します。その目的は、西洋社会での見聞を帰国後に日本の教育、なかでも皇女教育に活かすことであり、二

人の渡航の目的は、日本の女子教育向上という点では一致していたものの、動機や経験が異なっていました。

近代の日本において留学や洋行がもつ意味について触れておきたいと思います。明治政府は国家近代化という目標のもと、軍事、工業、経済、教育、学術などの分野で、男子留学生を欧米に派遣しました。石附実著『近代日本の海外留学史』（中公文庫、1992年）によれば、皇族や華族の間でも洋行が流行し、明治最初の5年間だけでも27人が留学したとされています。女性の留学は明治4年（1871年）の津田梅子など5人の派遣の後は途絶えて、音楽や保育の分野でちらほらとあるだけでした。外交官の家族や随行者として洋行した女性には、後に東洋婦人会や愛国婦人会で下田と協力した鍋島栄子、また女子高等師範学校附属幼稚園の保母となる豊田扶雄がいます。しかし、女子教育を目的とする教育者の派遣は1890年代のことでした。

下田の海外派遣を推した佐々木高行は、「今日より大いに憂慮在るは、皇太子殿下の妃皇女の御教育の異なり。下田歌子未だ欧州に行きたる事なければ、信用も薄く、一般世の人は馬鹿馬鹿敷ものにて、十分の学問出来る者も、一度欧州に行かずしては軽蔑される風あり」と周囲を説得しています。宮内省皇女教育掛の任にあった佐々木は、下田こそが皇女教育の適任者と確信し、彼女の経歴に箔をつけることをねらっていたのです。下田は1893年に欧米にむけて船出します。文部省が、女学校教育拡充のために、女子高等師範学校訓導の安井てつを留学させたのは、下田渡航の3年後、1896年のことです。また前述したように、津田のイギリス渡航は1898年から半年間でした。1893年から1900年までの短い期間に、下田、安井、津田が相次いでイギリスに留学しているのは興味深いことです。

3人が共通して訪れたのは、チェルトナム・レディーズ・カレッジという名門女子校、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の女性カレッジ、中等教員養成を目的とするケンブリッジ・トレーニング・カレッジなど当時のイギリスにおける最高峰の機関です。ドロシア・ビールやエリザベス・ヒューズのような著名な女子教育者とも面談しています。しかし、三者三様の立場と眼差しの違いが、イギリス滞在中の行動や意識の違いをもたらしました。

下田は皇女教育を知る手掛かりとして、貴族や上流階級、中流階級の家庭を訪問し、主婦の生活や家庭教育を仔細に観察しています。津田の関心は女子高等教育にあり、半年間の滞在のうち二か月はオックスフォード大学のセントヒルダズ・カレッジで聴講生として学びました。安井てつは、女子高等師範学校で教育を受けて、卒業後母校の教師となった女性です。1890年代の日本は、教育勅語の発布が象徴するように国民道徳の再建がめざされ、キリスト教への反発が強い時期でした。安井は女高師で「反耶蘇」の思想を叩き込まれますが、エリザベス・ヒューズのもとで3年近く学んで人格的な感化を受けてキリスト教に改宗し、1918年の東京女子大学の設立に参加し、二代目学長を務めました。下田と安井のキリスト教へのスタンスの違いは興味深いことです。津田梅子は、日本で女子高

等教育を実施するという抱負のもと、イギリスの大学や女子学生をアメリカと比較しています。英国教会の婦人たちの招待に応じたイギリスへの留学は、津田梅子にとって、二度のアメリカ留学に匹敵するほどの重要な意味をもつとは思えませんが、女子教育や高等教育に関する視野を広げると同時に、ヨーク大主教から受けた宗教的啓示やナイチンゲールとの対面を通して、女子英学塾設立という長年の夢の実現にむけての一步を踏み出しました。

宮内省から派遣された下田はヴィクトリア女王との謁見を切望し、帰国直前に実現しました。国家指導者としての視点で、大英帝国繁栄の要因を探り、産業や軍事に顕著に表れた国力差の原因が、教育と家族の違いにあることを察知しました。

3. 西洋の中流階級家庭と良妻賢母思想

帰国後の下田の著書『泰西婦女風俗』(1899年)『泰西所見家庭教育』(1901年)では、渡英経験を通して得た女性観、家族観、教育観が披露されています。下田は、イギリスの女性と日本の女性を比較して、「英国婦人の其の可なるべきことをあぐれば、剛毅にして堅実なり。其の不可なる点をあぐれば、執拗にして剛愎なり」「わが国の女子は、遺憾ながら、男子の後ろへに立ちて歩み、猶且つ、其後れがちなるを憾める者少なからざるべしとの評もある程なりかし。」と記し、イギリスの女性の強さと堅実さを評価し、日本の女性は男性の後に従うのみであることを遺憾としています。反面で、「執拗にして傲慢である」ことをイギリス女性の短所として、日本女性の美德を誇っています。下田は、女性参政権を主張して繰り返される議会への請願活動を、男性の領域に踏みこむ行為と批判しました。

当時のイギリス中流家庭では、男女の領域を分離するドメスティック・イデオロギーのもとで、女性は「家庭の天使」という規範のもと、家族の道徳的宗教的導き手であることが求められました。一家の主婦である女性が子女の教育にあたることは、下田にとって新鮮であり、優れたものと映りました。「泰西婦人の大半は、すべて母親の責任として、その子女教育に力を用ふる事一方ならず」と述べて、母による家庭教育を礼賛しています。またイギリスの家庭における夫と妻の関係にも目をやり、「全く夫妻は友だちの如き感ある國柄なればなるべし。我れの如く、ようせずば、主従の如き傾きある夫妻間にて、殊に舅姑などのありたらんには、いかに其妻なる人の心苦しぞ覚ゆべきなども思はれき。」と述べ、封建的家族制度の軛にある日本の女性に同情を寄せています。そして、「其子を教育するの手段方法に於て、彼は其智の進めるが故に、我れに優るの効果を呈する」として、西洋の母親が知識を備えている点で、日本よりも優れていると指摘しています。

下田は、西洋流ドメスティック・イデオロギーの影響のもとで良妻賢母思想を形成し、帰国後の言論や実践を通して代表的論客となります。彼女が「良妻賢母教育の権化」とされてきた所以です。女性の社会的活躍を推進する現在の日本を基準にして判断すると、保

守的で反動的な教育家と把握されることになるでしょう。しかし、彼女の良妻賢母思想が、女性の地位の改善をめざしたものだっただけを見落としてはなりません。下田の良妻賢母論は、西洋の中流階級家庭に範をとって、女性に従属を強いる封建的家族制度を変革することをめざしたもので、女性の家庭内地位を確立することを第一に、女性を啓蒙して「妻」「母」役割の重要性を説き、家庭経済や家事を運営する能力を身につけさせようとしたものだったのです。

西洋の中流階級家庭を範とした点は、津田梅子も同様です。しかし、欧米社会では女性は慈善活動や宗教活動、社交的活動への参加を通して地域社会で影響力を発揮していました。津田は、日本の女性が「健全な教育を受けないまま、家庭に閉じ込められる」ことに義憤を覚え、学校での良妻賢母主義教育を批判します。アメリカの中流家庭の理想を日本に移入して、女性の社会的自立を支える高等教育の実現を目標に据えました。下田は、彼女がみた西洋の「善きもの」を摂取することで、日本の伝統社会に適合する女性や教育の在り方を模索し、主婦としての自立を目標に据えたといえるでしょう。二人の考えや目標の違いが、実践女学校と女子英学塾という異なるタイプの女子学校を誕生させました。

4. 下田歌子の帰国後の実践

帰国後の下田は、「社会の中堅となる中等の人及び下流の人を間違いないように教育して、知識を進めながら固めていきたい」との考えから、帝国婦人協会を設立し、様々な事業を展開していきました。帝国婦人協会や愛国婦人会など婦人団体の組織化、実践女学校などの女子学校の設立、夥しい数の女性を対象とする修養書の執筆、そして中国女子教育の近代化をめざす一連の活動です。このように、広範で多岐にわたる活動を推進できたのは、下田歌子の人並外れた能力、知性、行動力、人脈と人望があってこそのことですが、その発想がイギリスでの見聞と体験に基づくものであるのも確かと思えます。

下田は『泰西所見家庭教育』で、「家庭教育中最も大切な事として其重きを置く所のものは心育これなり」と述べて、「心育」の重要性を指摘しています。家庭の食卓や、学校での授業開始の前に聖書を朗読し祈りを捧げるイギリス人の姿は下田の心をとらえ、信仰心が教育の基盤であることに感銘を受けました。安井てつがキリスト教を基盤とする人格教育に感銘を受けて、帰国後に受洗したことは前に述べましたが、下田の方は、「異国の宗教」であるキリスト教を「わが国神仏の信仰心」に置き換えて、神仏信仰を基盤とする良妻賢母教育の普及に力を注ぎます。

また、下田は体育やスポーツが男女を問わずすべての階級で盛んなことに驚嘆し、「大英帝国国旗の影、常に日没を見ずと誇れるに至れるだけ、其領土に、わが民種を蕃殖せしめんとするは、勢ひ厳寒酷暑にも耐ふべき健康の身体を作らざる可からざる道理」と、大英帝国の繁栄が国民の健康な身体に支えられていることを看取しました。国民の身体強化

のもとになるのは、子どもを産み育てる女性の身体強化であるという論理は、イギリス社会を席卷したソーシャル・ダーウィニズムの思想に基づいていました。下田は同様の論理で、女性の身体強化こそが国力強化の淵源であると主張して体育を奨励します。

イギリス到着後に勃発した日清戦争が下田に与えた衝撃は、多くのところで言及されています。『外の濱づと』では、「怖ろしきもの」として「西洋人の心の中、早晩、東洋諸州は吾が掌の中に握りてんと、」と記しているように、下田は西洋諸国が日本を含む東洋全体の植民地化をねらっていることに危機感を抱き、「西洋諸国に対抗する東洋の団結の必要性」を主張しました。それと同時に、戦争の勝利国となったことで、イギリス国民の日本に対する見方が一転したことを経験し、多くの日本人と同様に歓喜に浸っていてもいます。伊藤や山縣など政府高官と旧知の関係にあり、国費で欧米視察に派遣された下田の関心は、「皇女教育」から拡大して、西洋諸国の脅威に対抗しうる国力の強化、その人的資源である国民の強化、女性の能力開発と活用、東洋諸国との同盟的關係の確立等に向かい、そのいずれもが日本にとって一時も躊躇すべきではない緊要な課題と考えたのだと思います。

帝国婦人協会の賛同者には、近衛篤磨、土方久元、松方正義など皇族・華族、政財界の有力者とその夫人たち、板垣退助や歌人の高崎正風、のちに女子高等師範学校や華族女学校の校長となる細川潤次郎が名を連ねており、それは下田が女官時代から華族女学校を通して蓄えた人脈でした。王室関係者や名望家のパトロネイジを得て社会的承認を獲得するという手法は、19世紀のイギリスで盛んであった女性による団体活動において広くみられた組織戦術です。上流中流階級には良妻賢母教育を、下層の女性には職業教育を提唱したことにも、階級社会イギリスでの見聞が影響しています。階層化された女性の現実をとらえて、国益と社会不安の除去を理由に女子教育の必要を説くことは、これらの賛同者を獲得するのに不可欠な方法だったともいえるでしょう。

下田は同様の組織戦術で、中国での女子教育普及をめざす東洋婦人会や、軍事救護を目的とする愛国婦人会の設立に重要な役割を担いました。1901年に結成された愛国婦人会は上流中流女性の間を広範に浸透した団体で、帝国婦人協会から続く近衛篤磨等の繋がりとともに、三輪田真佐子など当時の著名な女子教育家が参加しています。下田は第一次世界大戦終結後の1920年に会長に就任し、戦時ではない平時の活動として、婦人職業紹介所や授産施設などの社会事業を展開しました。他方、津田梅子は1905年に結成されたキリスト教女子青年会(YWCA)東京支部の会長に就任し、キリスト教に基づく社会活動に関与します。1910年代には平塚雷鳥による『青鞥』の発刊など女性運動が芽吹きました。下田はこうした女権運動の拡大を警戒し、『愛国主義』(1912年3号)に「婦人政治熱の将来」と題する論説を寄せ、「穏健なる国家的思想を婦人の脳裏に注入して、女性に適当なる国民の務めを尽くさしめたい」と主張しています。その意味するところは、女性が家庭内で良妻賢母の務めを全うすると同時に、国家的な社会事業に協力することでした。日露戦争や第一次世界大戦を経て、下田の論調は国家主義的色彩を強めていきます。

5. 中国への女子教育の伝播

下田がこれらと並行して推進したのが、中国への女子教育の伝播です。これに関する研究は日本と中国の両方でかなりの蓄積があり、大きく言えば、それを大陸への侵略という国策の一端とするものと、教育を通じた中国女性の解放をめざしたとするもの、二つの見方があるように思います。中国近代史家の小野和子さんによる先駆的研究は前者の例であり、下田は「東亜の盟主としての日本の指導性を前提としつつ、中国の女たちの人種の改善と教育の普及を説いた」のであり、それは、「徹頭徹尾、国家のためにするところの女子教育であり、国家のために働く男子のためにするところの女子教育であった。」と厳しい指摘がなされています（小野和子「下田歌子と服部宇之吉」竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』上 朝日新聞社 1974年）。これに対して、本書のなかでは日本人教員の中国派遣がとりあげられ、「日本が古来より中国から受けてきた文化的恩恵に対する恩返し」として女子教育の振興をはかったとする考察が展開されています。下田が実践女学校留学生の最初の卒業式に送った告辞の一節に、「貴嬢方を養ったのは清国であっても、教えを受けた国は日本であることを忘れないように」という文言がありますが、それは二重の意味を含んでいるように思えます。漢学者の家系に育ち学んだ下田の中国の文化的伝統に対する畏敬は揺るぎないものであったでしょう。他方で、今や優越の関係を逆転させた日中関係に誇りを抱き、日本で醸成された良妻賢母思想と教育で中国女性を教化することにより、西洋列強に対抗する「東洋圏」を形成するという政治的意図もしっかり持っていたと推察します。

「貴嬢方を養った国は清国であっても、教えを受けた国は日本である」という言葉は、日本で生まれ、アメリカで教育を受けて、日本に帰国し、日本の女子教育に貢献する方途を模索した津田梅子のことを連想させます。彼女のトランスナショナルな経験と意識変容についてはまた別の考察が必要です。留学生を派遣する側と同時に、受け入れる側の意図やその結果は、「国際交流」という無色の言葉では説明し尽くせない複雑さを含んでいるように思います。今後考えていきたいテーマです。

今回の叢書で下田と津田を比較するにあたって、華族女学校とイギリス留学に焦点をあて、二人のトランスナショナルな経験が女子教育の創出に及ぼした影響を考察しました。叢書中で触れることができませんでしたが、下田と津田を比較考察した先行研究として、彼女たちの社会的実践や言論活動に着目した英文文献を紹介しておきます。

Linda L. Johnson, 'Meiji Women's Educators as Public Intellectuals: Shimoda Utako and Tsuda Umeko', *U.S.-Japan Women's Journal*, No44, 2013, pp.67-92.

おわりに

最後に、本シンポジウムのサブテーマ「下田歌子は、女子教育を通して、何を変え、何を実現しようとしたのか」という問いについて考えます。

下田が、伝統に固執し、体制に与するばかりの「保守的教育者」ではなかったことは、下田の実践から明らかであり、西洋に比して、また日本の男性に比しても、後れている女子教育の近代化と女性の地位の改善に、生涯をかけて取り組んだ人物といえます。それを支えたのは、個人主義やデモクラシーの思想ではなく、「日本の精神的伝統に即した近代国家建設」の使命でした。イギリスと日本を比較して、西洋の優れた点、日本の足りない点を客観的に把握し、西洋文化の長所を躊躇なく摂取する「開明思想」と、日本の伝統道徳や文化のうえに強力な国家形成をめざす「国家主義」は、下田のなかで、矛盾することなく併存していたのです。下田は、女性が家庭という領域を超えて社会的権利を求める運動には共感せず、家庭の主婦として自立性を確立することを最善ととらえて、良妻賢母教育のイデオログとなります。民権の国と伝え聞いたイギリスで性差と社会階級による差別がまかり通り、労働者階級への教育が社会不安の解消としても機能していることを知り、国家秩序維持の参考としたのかもしれない。

しかし、下田がもつばら国家の利益にのみ関心を集中し、女子教育はそのための手段に過ぎなかったのかといえ、決してそうではありません。下田は女性が家庭内の従属的地位を克服し、一家の生活と家計、子の教育を自分自身の考えに基づいて実行できるようになることをめざし、その力をつけるために良妻賢母の思想と教育を唱道したのだと言えます。

下田歌子の広範な実践と多義的な思想を包括的に分析することは、私の現在の力の及ばないことであり、本書の執筆を通して感じたことをお話させていただきました。

下田歌子・津田梅子 略年表

年	下田歌子	津田梅子
1854	誕生(幼名 平尾せき)	
1864		誕生(幼名 むめ、うめ)
1871	父の後を追って、上京	岩倉使節団に随行して渡米
1872	宮中に出仕、皇后より歌子と命名	アメリカ到着、ランマン家へ
1879	宮廷を辞す	
1880	旧丸亀藩士下田猛雄と結婚	
1882	桃夭学校開校	アーチャー・インスティテュート卒業、帰国
1884	下田猛雄死去 宮内省御用掛、華族女学校準備委員	桃夭学校で教え始める
1885	華族女学校教授就任	華族女学校教授補就任
1886	華族女学校学監	華族女学校教授
1889		渡米、プリンマー・カレッジ入学
1892		帰国、華族女学校に復職
1893	欧米教育視察出発	
1895	ヴィクトリア女王拝謁、帰国	
1898	帝国婦人協会結成、会長就任	万国婦人クラブ連合大会出席、イギリスに渡航
1899	実践女学校、実践女子工芸学校設立	オックスフォード大学セントヒルダズ・カレッジ聴講生、帰国
1900	『新選家政学』刊行	華族女学校退職、女子英学塾開校
1901	愛国婦人会設立発起人	
1902	実践女学校に清国女子達成科	
1905		東京YWCA発足、初代会長に就任
1906	学習院教授兼女学部長	
1907	学習院女学部長を辞任	病氣療養のため渡米
1920	愛国婦人会会長	
1929	実践女学校に付属夜間女学校	死去
1938	死去	

かがわ・せつこ/西九州大学 名誉教授・津田塾大学言語文化研究所 特任研究員